踏　み　跡　＜My　Mountains＞

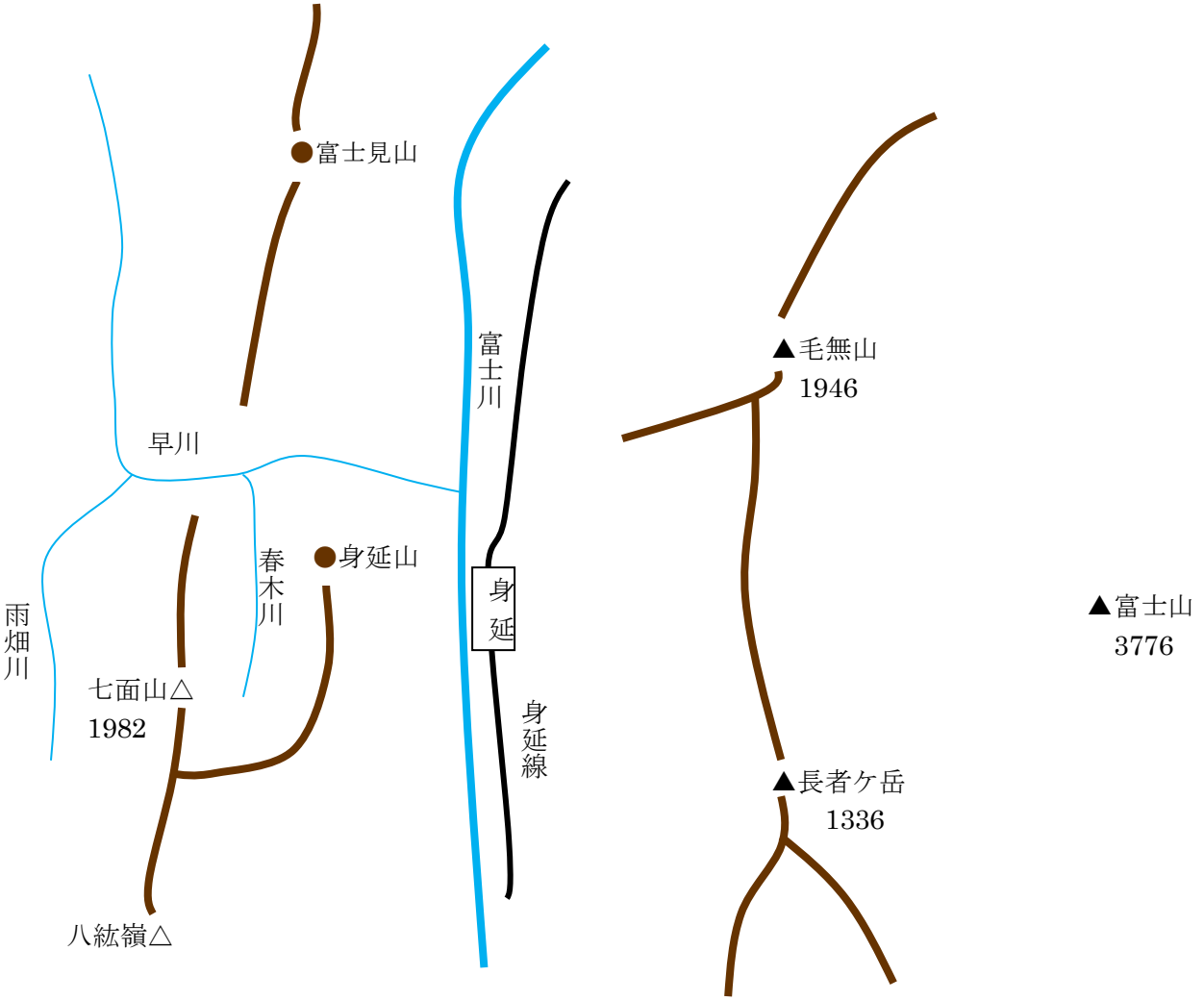
奥秩父ほか	笛吹川西沢　そして　身延山	No.114

笛吹川と身延山？　まったくおかしな組み合わせと言わなければなるまい。
共通点といえば、どちらも山梨県にあるということぐらいか。
実はこんな取り合わせの山旅はわざわざ企てた訳ではなく・・・・・・・・

＜その１：笛吹川西沢の旅＞
昭和４３年９月２２日
会社の仲間三人と、たまには一緒にどこかへということになり、この旅となった。
深夜の町はずれの畑の中を４０分ほど歩いて立川駅に到着。立川発２時２６分の臨時電車に乗車。
新宿から乗ってくる三人と電車の中で合流。連休ゆえに臨時電車でも満員。
塩山着５時１１分。大菩薩、奥秩父、乾徳山、笛吹川渓谷と多くのハイキングや登山の起点ゆえにバスターミナルは超満員。５時４５分発の三台目のバスに乗車。もちろん座れるはずがない。
吊り輪につかまって居眠り。西沢渓谷入口(道路終点)に７時。
鶏冠山の峨々たる岩稜を眺めながら朝食をとり、西沢に入る。
谷に沿って杉の木を並べて作った梯子のような遊歩道。かって笛吹川と言えば秘境の代名詞のように言われていた時代のことを考えてみると、まったく今昔の感がある。まだ新しい杉の皮を踏んで歩く足元は花崗岩の白い岩床。その上を滑るように流れる碧緑色とも言わなければならぬような水の色。
数知れぬ程のナメ、トロ、釜。ありとあらゆる形を揃えたような滝の数々、「げに渓谷美はここに集められたり」と言ってもオーバーでないような・・・・。
「鉱毒あり飲用不可」の立札に見るように、この碧緑色の水の色は多量の鉱物成分によるものらしい。
不動小屋まで来ると鉱泉ほどの硬水になり、さらに奥に入れば沢の中に湯が出ている所もあるらしい。
不動小屋は湯の出る山小屋と言われているようだ。連休ゆえ予約の客だけで１００人を軽く越すだろうと言う。空いていれば一泊、と思っていたのだが断念。もし一泊すれば東沢にまわって鶏冠尾根へまたは京の沢出合いを経て天狗尾根へと良いコースがいくらでもあるんだが・・・・残念。
河原で昼寝をしたり何度となく食事をしたりで、のんびりと今朝の道を戻った。
まだ部分的な色づきしかしていないが、水の流れにはもう秋の気配が染み透っているような感じがする。
あと何日後かにこの谷が紅に染まる時、その景色は想像だけにしておこう。何故なら、その頃はまたさらに混雑して人間ばかりになってしまい、景観を味わう余裕すらなくなるのだろうから。

＜その２：身延山への旅＞
塩山駅で新宿に向かう皆と別れて、下り１７時４３分発松本行に乗り込む。
甲府で身延線に乗り換え身延駅に降り立った時はもう真っ暗闇の１９時。１０分ほどバスに揺られて着いた所は身延山登山口。灯りがついた旅館街を通り抜けて大きな山門。
日蓮宗総本山久遠寺。佐渡から帰った日蓮上人が入山したという。門をくぐるとすぐに２８７段の菩提梯（ぼだいたい）と呼ばれる石段。ただでも暗い杉林の中、日が暮れてから登る石段の恐ろしさはひとかたならぬものがある。吸い込まれるように、何かにとりつかれたように一段ずつ確かめながら登って行く。
石段を登りきったところは砂利が敷き詰められた平坦な所、そして堂宇の連なり。宿坊がある西谷の方から上がってくる道と合するあたりにロープウェイの駅。
きれいな冷たい水が可愛らしく月の光を返している。今夜の宿はもの水の傍のベンチの上。

昭和４３年９月２３日
西谷の方から聞こえてくる団扇太鼓の音で目がさめた。時計を見ると４時３０分。空はもうほんのり明るい。
やがて東谷からも参道からも団扇太鼓の音。ひとつ、ふたつ、みっつ・・・いくつもいくつも聞こえてくる「南無妙法蓮華経」の声。
５時出発、いかにもお寺らしい朝を体験して足取りも軽く心もさわやか。信者に遅れを取ってはならじと歩き始める。途中で富士山の左首あたりから顔を出す太陽を迎える。
それからは、右から強い陽の光を浴びて暑いこと暑いこと。

踏　み　跡　＜My　Mountains＞

身延山頂上、思親閣という堂がある。ここは日蓮上人が安房の両親を思って下界を見下ろしたところだと言われている。火の消えた線香数本にマッチをすり、しばし沈黙。日当たりの良いところでスケッチと昼寝。下りは、七面山参道を春木川へ。富士は笠雲。
赤沢は昔から講のための宿として栄えたところ。右に左に並ぶ宿の数々は皆大きく立派で、そして古いものばかり。よく見ると、江戸屋、大阪屋というように土地の名前を付けた屋号と、大黒屋、ゑびす屋というようにめでたい神の名を付けた屋号が多いことに気がついた。
谷ひとつへだてた七面山は、１９００ｍを超す高さだけにさすがと言える大きさ。
バス停まで下り、なめこ蕎麦を食べる。身延山と七面山の参拝客と登山客とで店もバス停も満員。さらにそこへ南アルプスを下山してきた登山客が加わり、バスは膨張状態で乗る事もできない。
しかたがないので早川橋までのんびり歩くことにした。早川左岸の１ｍほどの幅の小道を、あけびを食べたり椎の実を拾ったりしながら歩き、早川橋からバスに乗り身延駅へ。
身延駅で出会った若い僧がこんなことを教えてくれた。
「彼岸の中日に、七面山から来迎を見ると良い。富士山の頂上から来迎があり、それは素晴らしいものだ」
以上